
夏の日の午後

はなだりょう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏の日の午後

【Zコード】

N3476C

【作者名】

はなだりょう

【あらすじ】

今日、今この瞬間手に出来ないものは、多分なくとも生きていけるものだ。「ただの今日」という日がただ連なつて人生を作り上げる。

「お前から電話してくるなんて珍しいじゃん、どうした?」

俺は電話の向こうの友人に尋ねる。

ここにと電話で話す事自体は珍しいことじやないけど、それらはあくまで俺からの一方的なものだ。こいつから俺に電話がかかって来る事なんて、それこそ年に一度あるか無いからだ。

「あひやひや。

いや、特に意味はないけど。

まあなんつつかせ、夏が近いなと思つてわ」

俺は窓の外に田をやる。

多分夕暮れ時。

地面に陥没する形で建つてゐるアパートの1階に位置する111からでは、夕日は見えない。

だけど田を開じれば鮮烈にイメージできる。

夜の闇の中では見えない、

日中の太陽光の中では見えない、

そんなものを夕焼けの中にだけ見て取ることが出来る。

「確かに、夏っぽいね。

もつ7月入つてゐるんだし夏つつても差し支えないかもね」

「んだね」

そして長い沈黙。

こいつとの電話では珍しくない。
何かの距離を物差しで正確に測つてゐるような、
纖細な沈黙だけが空間を支配する。

しばしの沈黙の後、それとなしに聞いてみる。

「やうこや、もつわらなんじやないの?」

一呼吸分の沈黙。

「んー、かもね」

「そつか。

まあだからなんだって話なんだだけね。

あーだこーだ言つてもしようがないしね。
言つてもりもないし」

「うん」

「こいつはこいつもこいつだ。

ゆるい雰囲気で何でもかんでも曖昧なふうにしてしまつ。

そういうのが滅法うまい。

だから俺はこいつに何も言えない。

だからこそ必要以上の事をつい言つたくなつてしまつ。

そしてその事を多分こいつは知つてゐる。
ほんとに、つかみ所のないやつだ。

「まあいいや。

明田も作業場の方には来んの?」

「 もういい。

まあ料金もあるし、わざわざ行かなくてここにまわるだけだ。
れ。

俺にひとつあればお金の為とか、やうがことか、やつこのじやないかられ」

「 うそ

「 なんこいつか、使命?みたいなの」

「 はは

「こや、ジロークじやなハマジでれ

「うん、分かってるよ。

その事についてはよく分かってる」

「 わつか。

じゃあ、また明田ね

「 うん、また明田」

がちゃんと面を立てて電話が切れ。

その音は携帯電話が主流の今時珍しい。

そしてその「がちやん」とこつ音はなぜか少し心地いい。

俺はもう一度窓の外に田をやる。

網戸越しの風が、夏の到来を告げてくる。

あいつが死んだのは最後の電話から一日後の夜だった。

死ぬ直前に自分で救急車呼んだらしい。

でも救急車があいつんちにいた時にはもうすでに心肺停止状態だったそうだ。

死因はなんかよくわかんない病気。

病名は前にあいつ自身から一度聞いたけど、もう思い出せない。
なんかやたら難しい名前だったことだけは覚えてる。

友達が死んでなんでこんなに冷静にいられるのか、自分でも不思議に思う。

その要因は多分いくつかある。

ひとつはまだ「あいつが死んだ」って事についてうまく実感出来てないんだと思う。

もうひとつは死ぬまでのあいつの態度。

ぶっちゃけ、元気だった頃から何一つ変わりはしなかった。

病気の事を俺に打ち明けた時にも、あののらりくらりとした態度だった。

俺、なんか難しい名前の病気になっちゃったよー、どうしよう、やっぱいよー。

ふん、そう。

病名聞きたい？

h
|
o

病つて言うんだつてさ。

へー、なんか随分長つたらしい名前だな。

俺もうすぐ死んじゃうからさ。
なんかもう結構進行しちゃうからさ。

まじで？

うん。
まじで。

シミーケじやなくて？

ジニーケジマなくて

へーきなの？

ん
ま
ね

そつか。

まあ、だからなんだつちゅう話なんだけれどね、一応報告しといた。

うん。てか、あとどれくらいもつの？
入院とかしなくていいわけ？

どーだろね。

でも長くても半年はもたないらしいよ。
早いと1ヶ月くらいでぱっくり逝っちゃうってさ。
入院はしてもあんまし意味ないって言ってたから、
そんじやあ自宅療養でいいかつて話になつた。

そつか。

それよりさ、あのゲームさ、あのカナディアンウイスキー密輸する
ミッションのアレ難易度やばすぎて進めないんだけど。

あー、ポーリー勝手に敵の群れに突っ込んで死んじゃうし、同行キ
ヤラ死ぬと即ゲームオーバーだもんね。
まじ待たれよ！って言いたいよね。そういうシステムつけるべきだ
よね。

トニーがポーリーに「待たれよ！」するの。

まじつけるwwwそれ見たいんだけどwwwwww

あいつのああいう態度が今の俺にもたらす作用なんだと思つ。

なんかこの、買い物溜めしといったばずのアイスが気付いたら無くなつ
てた、程度の喪失感で済んでるのはさ。

俺も俺なりには考えてたんだ。

人が死ぬって事について。

自分が死ぬって事について。

それがどういうことなのか。

生きてりやいつか死ぬ。

当たり前のことだ。

いい人生にも、悪い人生にも、

誠実なやつにも、不誠実なやつにも、それは確実に訪れる。

短いやつがいて、長いやつがいる。

それは何も人生の長さだけじゃない。

何もかもだ。

「そこで大事なのは長さじゃなくてどう生きたかだ」ってな事を誰かが言つてた。

充実、大成、幸福、愛、

人はそれらを生きた証として石碑に刻もうとする。

でもあいつは違つた。

あいつがそこに刻んだもの。

それはただ生きるつて事。

ただ生きる。

ただの自分としてただの日々を生きる。

それには努力も根性も才能もいらない。

いかなる種類の努力も、いかなる種類の根性も、いかなる種類の才能もそれは必要としない。

むしろ、努力と根性と才能の外にあるものが「ただの自分」だ。

「お金の為とか、やりがいとか、そういうのじゃないからさ」

俺はあいつが生きていた事を知っている。

あいつが死んだ事を知っている。

ただのあいつを知っている。

あいつが笑ったこと、あいつが腹を立てたこと、

あいつの優しさ、あいつの傲慢さ。

あいつの全てを知ってる訳じゃないけど、

でも俺の知るあいつの中に「ただのあいつ」はいた。

だから俺はその事をこうしてただ書き記す。

ただの記録。

俺もいつか死ぬ。

いつかは死ぬ。

もし余命を言い渡されたとして、

俺は充実や大成や幸福や愛に対しても必要以上に手を伸ばすことなし
ないだろう。

今日がある。

生きるとか死ぬとかじやなくて、

ただ今日という日がある。

正しいとか間違いとかじやなくて、

今日も俺はただここにいる。

正しいこともするし間違ったこともする。

ただの今日を生きる。

優しい気持ちの時もあれば、イラライラしてる時もある。
多くを受け入れられる時もあれば、酷く傲慢な時もある。
ただの俺として。

今日が降り積もって、俺の人生になる。

「ただの今日」という日の連續。

それが俺の人生。

だから俺は誰にも、何も偽らない。

思ったこと、感じたこと、やりたこと、やったこと。
全てで今日を生きる。

そしていつか死ぬ。

これはあいつの死から学んだ事じゃない。

あいつと生きた時間から学んだことだ。

これを読む君たち俺が言える事は一つだけだ。

「よし夜を」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3476c/>

夏の日の午後

2011年10月3日16時32分発行